

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520056

研究課題名(和文) ソーシャル・キャピタルとしての宗教に関する国際比較研究

研究課題名(英文) International Comparative study of Religion as Social Capital

研究代表者

稲場 圭信 (INABA KEISHIN)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授

研究者番号：30362750

研究成果の概要(和文)：本研究は、海外との比較により、ソーシャル・キャピタルとして日本の宗教が担う社会的な役割の特徴を明らかにした。3割以下と宗教人口の少ない日本においても宗教の社会貢献活動が活発化している。その内容は、災害時救援活動、発展途上国支援活動、平和運動、環境への取り組み、地域での奉仕活動、医療・福祉活動、教育・文化振興など非常に多岐にわたり、日本の宗教がソーシャル・キャピタルとして機能する可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study deals with religions as social capital. Nationally less than 30 per cent of the Japanese recognize themselves as religious. Under such circumstances, some religions have been involved in social contribution activities which include relief activities during emergencies and disasters, support activities in developing countries, peace movements, the promotion of education and culture, and human resource training. This research showed that religions in Japan can be a social resource to foster a spirit of mutual cooperation as social capital.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教、ソーシャル・キャピタル、利他主義、宗教の社会貢献

## 1. 研究開始当初の背景

## (1)社会的・学術的背景

ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)とは、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」など社会組織の基盤にある特徴である(ロバート・パットナム,2006,『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』)。

20世紀、そして第二次世界大戦後は、世界の

多くの国が民主主義化を進め、豊かさを求めた時代であった。しかし、犯罪や貧困など世界的に多くの課題が残され、環境問題やテロリズムなど新たな問題も発生した。交通手段の発達と雇用形態の多様化により移動性の高い社会になると平行して、都市化・核家族化が進み、枠組みとしての共同体は崩壊した。安定的な民主主義の基礎であった社会的信頼という道徳的インフラの崩壊が警告されている(ロバート・ベラー他『心の習慣』)

『良い社会』)。リスク社会で、現代人は、ソーシャル・キャピタルの乏しい関係性を生きている。そして、今、過剰な利己主義への批判から、思いやりや利他主義研究が盛んになっている。このような流れのなかでソーシャル・キャピタルが注目されている。

ソーシャル・キャピタルとして宗教がみなされる場合、宗教的利他主義、宗教の社会貢献活動、宗教的ネットワークの次元での研究が必要となる。それらは、その社会のあり方や法制度とも関連してくる(稲場圭信,2004,「宗教団体の社会奉仕活動と社会制度—英米仏を中心とした一考察から展望する日本の宗教NGOの将来」『神道文化』第16号)。宗教がソーシャル・キャピタルとして市民社会の構築に参画するということは、宗教的救済の次元を公共的な利益や市民の効用というレベルにすりあわせ、社会的支持を獲得することを意味する。

アメリカではブッシュ政権の政策とあいまって、ソーシャル・キャピタルとしての宗教に対する関心が高い(Corwin E. Smidt (Editor), 2003, Religion as Social Capital: Producing the Common Good)。ニューヨーク州立大学ロックフェラー研究所では信仰に基づいた社会サービス(Faith-Based Social Services)を研究している。

イギリスでは、排除された人、孤立した人を取り込むような支えあう社会、包含的社会をつくりだそうとニューレーバー政権がソーシャル・キャピタルの考え方を積極的に導入した。市民の自発性にもとづくパートナーシップがより進められた。しかし、テロ問題、移民問題があり、インクルーシブな社会の実現が困難な状態である。そのような社会的葛藤、軋轢の中で、ソーシャル・キャピタルとして宗教に関心が向けられている(Robert Furbey et.al,2006,Faith as social capital: Connecting or dividing?)。

## (2)研究組織の背景と着想に至った経緯

研究代表者は、2005年3月、東京で開催された国際宗教学・宗教史学会(IAHR)において、宗教と福祉、利他主義、ボランティアに関するパネル発表の運営に携わり、イギリス、アメリカ、アジア諸国の研究者と交流し、国際比較研究を進めた(平成17-19年度科学研究費補助金、若手研究(B)「市民社会時代のボランティア・利他的精神の発達における宗教の役割に関する国際比較研究」)。そして、申請者とアメリカの研究協力者Ruben Habitoが編者となり、研究分担者である櫻井義秀とランジャン・ムコパディヤヤも参加し、イギリスの出版社から学術書を刊行した(Ruben Habito & Keishin Inaba eds, 2006, The Practice of Altruism: Caring and Religion in Global Perspective)。また、

研究代表者と研究分担者のランジャン・ムコパディヤヤは、数名の研究者とともに『宗教と福祉』(2006年)を刊行した。

さらに、研究代表者は、研究分担者の大谷栄一らと「宗教の社会貢献活動研究プロジェクト」を2006年6月に立ち上げた。

研究代表者は、2006年12月にワシントンD.Cで開催されたNYUロックフェラー研究所主催の宗教の社会貢献に関する会議(Partnering with Faith- Assessing Government Alliances with Religious Groups)に、日本からただ一人参加した。

本申請研究は、以上のような2005年以後の研究にソーシャル・キャピタルという視点を取り入れた国際比較研究であるが、その研究土台とネットワークはすでに築けている。

宗教的世界観を共有したメンバーによって構成されるボランティア活動や平和活動は、宗教的世界観を共有しない人には奇異に感じられ、そのことが閉鎖的な感覚を与える可能性もある。一方、ホームレスや高齢者のために広範な活動を展開している宗教もあり、利他的な慈善活動が教団としての閉鎖性を乗り越えて教団外の人に利他的な倫理観を伝えていく可能性もある。そこにグローバル化する世界におけるソーシャル・キャピタルとしての宗教の社会的役割がある。個々人の尊厳が保たれ、多様性を否定しない、より住みやすい社会システム、市民社会の構築を目指し、これまでの研究成果と国際的ネットワークを生かし、国際比較のもと、さらなる研究の必要性を感得し、本研究プロジェクトを立案した。

## 2. 研究の目的

本研究は、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)の観点から宗教の社会的な活動や影響に焦点を当て、日本と諸外国を比較研究し、それぞれの文化、歴史、社会、法制度の中で、宗教が担う社会的な役割の特徴を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

日本、欧米、アジアの諸外国を調査する。また、文献資料により、法制度、組織、社会と個人(規範意識、宗教心、価値観)の各次元から包括的にソーシャル・キャピタルをとらえ、宗教の社会的な役割にアプローチする。

韓国においては、韓国宗教界の社会貢献活動に関する文献調査を行い、『社会福祉支出推計のための韓国宗教界の社会福祉施設支援金実態調査：2001-2003』(コ・ギョンファン、2006)等の資料を得た。ソーシャル・キャピタルとしての韓国宗教界をマクロな視点から分析する上で重要な論文であるため、韓国保健社会研究院にて、コ・ギョンファン研究員に面会、研究の背景について説明

を受けると共に最新の研究報告書を入手した。また、曹溪宗社会福祉部で活動の現状を尋ね、同教育院にてキ韓国仏教会の社会福祉活動の理念的・史的背景と聖地巡礼プログラムなど韓国キリスト教にない個性について説明を受けた。さらに初代文化相・李御寧博士に面会し、文明的視座からの宗教と福祉の関係再考について意見交換を行った。さらに、伝統文化の保全・活性化に貢献し、社会関係資本として機能する宗教の在り方を考察する事例として2002年に始まり年間利用者数14万人と著しい発展を遂げ国際的に注目を集める韓国テンプルステイ事業の調査を行った。総合情報センターにて専属スタッフから説明を受けるとともに、全100寺のそれぞれに異なる事業パンフレット等、資料を収集した。

日本においては『宗教者九条の和』輝かせたい憲法第九条 第4回シンポジウムと平和巡礼 in おおさか(平成20年9月27日、於大阪カテドラル聖マリア大聖堂、参加者400名)に参加し、現代日本における宗教者の平和活動に対する取り組みを参与観察した。この集会の主催者である宗教者九条の和はさまざまな宗教団体の連合体だが、この活動自体が宗教間対話と協力から成り立っている。また、その活動は宗教団体のみに止まらず、市民団体との協力も掲げており、ソーシャル・キャピタルとしての宗教の役割を検討する上で重要な事例である。また、宗教者九条の和設立の背景やその活動内容、日本山妙法寺としての平和運動への取り組みについての調査も行った。台湾の仏教団体で、NGO国際佛光会など、国際的な社会貢献活動で著名な団体である佛光山の日本における活動を中心に調査した。

山形県鶴岡市の羽黒修験の登拝行事を2009年8月に調査し、地域の伝統的宗教文化におけるソーシャル・キャピタルの特徴と機能について考察した。調査では、おもに登拝行事を先導する修験者4名に対するインタビューを行い、約10時間の発言データを得た。また、アンケートを33件に配布し、6件の回答を得た。

野宿者を支援する Faith-Related Organization の「北九州ホームレス支援機構」(福岡県北九州市)と「ハンド・イン・ハンド」(北海道札幌市)を訪問調査した。

台湾、財団法人・仏教慈濟基金会の研究調査に行き、調査を行った。

#### 4. 研究成果

(1)本研究は、制度、組織、社会と個人の各次元から包括的にソーシャル・キャピタルをとらえ、海外との比較により、日本の宗教が担う社会的な役割の特徴を明らかにした。3割以下と宗教人口の少ない日本においても、

宗教の社会貢献活動が活発化している。その内容は、災害時救援活動、発展途上国支援活動、平和運動、環境への取り組み、地域での奉仕活動、医療・福祉活動、教育・文化振興など非常に多岐にわたる。しかし、直接的に目に見える社会的実用性のみではなく、寺院や神社など宗教施設が、地域社会での居場所、交流の場、安らぎの場、イベントや福祉活動の場、市民との交流の場として機能している事例から、諸外国とも異なる独自のあり方で、日本の宗教がソーシャル・キャピタルとして機能する可能性が示唆された。

#### (2) ソーシャル・キャピタルとしての宗教

欧米では、ソーシャル・キャピタルとしての宗教に対する関心が高い [Smidt ed. 2003, Furbey et. al 2006]。宗教が、人と人とのつながりを作りだし、コミュニティの基盤となる可能性がある。そして、そこに宗教的利他主義との関連が論じられる。

アメリカでは、ソーシャル・キャピタルとしての宗教を集合財とみなす立場が主流である。アメリカの教会がソーシャル・キャピタルを創出するのに成功している理由として、ラム・ナン [Cnaan 2002: 255-278] は、情緒的なニーズを満たす、聖職者は地域社会を良くしてメンバーをつなぎとめる努力をしている、社会的責任を説く宗教教育、地域社会の変化により宗教組織だけが主なローカル地域社会の担い手となったなどをあげている。ウスノー [Wuthnow 2002] は、ブリッジ型(橋渡し型) ソーシャル・キャピタルとしてステイタス・ブリッジ(status-bridging)を取り上げている。

ステイタス・ブリッジは権力、影響力、富、名声に関係し、職を得たり、経済的に豊かになったり、教育・医療の支援を得られたりなどの便益があるつながりを生み出すと指摘する。教会のメンバーのほとんどが、政治的リーダーや経営者でもないが、教会に参加している人は、参加していない人よりも、そういった人たちを友人に持つ傾向がある。このようなことがステイタス・ブリッジ・ソーシャル・キャピタルである。教会活動に参加し、自分よりも社会的ステイタスを持つ人と知り合う。そして、その人から様々なソーシャル・スキルを学ぶ。一方で、自分より経済的に、社会的に恵まれない人にも出会う。そこで、社会的責任を感じ、福祉活動にも参加するという可能性がある。つまり、教会参加から市民参加、政治参加へと地域コミュニティに広がっていくということである。さらに、ウスノーは、彼自身が実施した Civic Involvement Survey (1500名のサンプル)のデータをもとに、教会が、その規模によらず、メンバー間につながりを作り出し、困った時に頼れる人も同じメンバーの人たちと

いう環境を持つソーシャル・キャピタルであると論じている [Wuthnow 2004]。

ロサンゼルスでの労働の場における社会福祉に関する研究 [Monsma & Soper 2007] では、教会組織 (FBO: Faith-Based Organization) が困っている人に効果的に役に立っているのかどうかを検証している。アメリカ政府が 2004 年に導入したプログラム「労働に向けた福祉 Welfare-to-Work」は、社会福祉を就労に向けての一時的な扶助・支援として位置づける。そして、NPO、行政組織、教会が、このプログラムをサポートする。上記の研究では、教会参加が高い人は、そうでない人よりも、よりソーシャル・キャピタルを持っており、Welfare-to-Work プログラムの効果とも相関があると結論付けている。

イギリスでは、1980 年代のサッチャー政権により排除社会が生み出された。1997 年、トニー・ブレア率いるニューレーバー政権は、包摂社会を目指し、ソーシャル・キャピタルを政策的に導入した。市民の自発性にもとづくパートナーシップがより進められた。そして、信仰を基盤にしたチャリティ団体が貧困の撲滅や社会福祉の現場で幅広く活躍している [Furbeyet. al 2006]。

日本では、1995 年、阪神淡路大震災の際に、キリスト教、仏教、神道、新宗教、多数の宗教団体が救援ボランティア活動を展開した。その内容は、緊急支援物資の運送・配布、炊き出し、避難所のトイレ掃除など多岐にわたった。一方、多くの被災者が心のケアを必要としたが、宗教団体による心のケアは布教活動につながるのと警戒感もあり、宗教団体が前面に出て行うことはあまりなかった。宗教性や教団色を薄めてのボランティア活動に賛否両論があったが、宗教団体の組織力をいかしての迅速な救援ボランティア活動は、大きな社会的力となることを証明した。

このような宗教団体が行っている宗教的利他主義に基づく社会貢献活動が多数存在するにもかかわらず、そうした活動への社会的認知度や期待は高くない。実際に、庭野平和財団による調査 (『宗教団体の社会貢献活動に関する調査』2008 年) では、「宗教団体の学校教育活動、病院運営などの社会貢献活動を知っている」人は 35 パーセントにとどまる。宗教団体の社会的な活動に対する認知度が低いということは、宗教がソーシャル・キャピタルとして機能するコンテキストが弱いことを示している。つまり、現代の日本社会では、宗教者が地域社会と強い信頼関係を持ち、住民との深い関わりによって人びとをつなぐような土壌があまりないということである。

すでに見たように英米のソーシャル・キャピタルとしての宗教に関する研究では教会

参加が中心である。しかし、日本は、無宗教を自認する人が多い一方で「無自覚の宗教性」が残る拡散宗教状況であり、見える宗教とは別のマクロの視座が必要である。つなわち、ソーシャル・キャピタルの源泉としての無自覚の宗教性という視座である。

### (3) ソーシャル・キャピタルとしての無自覚の宗教性

近年、ボランティア (ボランタリー) 活動は、生活の充実、自己実現、自発性、個人主義を看板に日本にも浸透しつつある。しかし、ボランティアを支える思想である個人主義は他者への配慮をともなった個性化であり、多くのボランティア活動の実態は、利己主義とは馴染まない社会活動である。個性化は他者との差異化により生じ、その差異化は集団へのコミットメント、関わりという社会性があるとはじめて形成される。従って、本質的にボランティア活動は公共性とその公共性の中に見え隠れする個人個人の自発性という両面をもっているはずだ。ボランティア活動が個人的な趣味や自己利益と結びつけて論じられることが多い。ボランティアの数を増やすための賢い戦略と言えようか。しかし、このような「新自由主義的ボランタリズム」は、現実では機能していないのではないか。ボランティア活動に多少なりとも参加したことがある人ならば、きっかけや動機が自己利益のためや個人的な趣味であったとしても、継続的に活動に関わるならば、そのような個人的な希求を中心に活動を展開することは事実上不可能であることを実体験として理解している。そして、継続的にボランティア実践を続けている人の心の源泉には、「新自由主義的ボランタリズム」ではなく、本稿で提示した「無自覚の宗教性」がある場合が多い。

登拝行事の調査から、先達が「神や山への感謝」をうながし、それを登拝活動の基軸とするような宗教文化ならではの象徴的側面が明らかになった。ソーシャル・キャピタルの構築につながる登拝の協働という行為が、社会的関係のレベルだけでなく「山への感謝」を基調とすることを意味する。こうした「恩」の感覚は、先祖に対する「恩」ともむすびついているだろう。また、登拝の行為は、「山」という強力な感性的喚起力をもつ環境に包まれている。こうした非日常的な劇的環境につつまれているなかでこそ、先達の導きによって山や先祖に対する「恩」の感覚も喚起されると考えられる。

ソーシャル・キャピタルとしての宗教、すなわち、宗教文化・空間・思想が与える安心、地域コミュニティにおける人と人とのつながりがある。その基盤として無自覚の宗教性も捉えられよう。

北九州ホームレス支援機構などの調査から浮かび上がったことは、宗教的なプレゼンテーションをおこなうことは政教分離の原則に抵触しかねることとして差し控えられる傾向があるということである。そのため、北九州ホームレス支援機構は日本で最も活動的な Faith-Related Organization のひとつであるにもかかわらず、宗教との結びつきのなかで論じられることはこれまでほとんどない。このように、Faith-Related Organization には宗教との結びつきが見えやすいものから、見えにくいものまで多様であることが、調査を通じて確認することができた。宗教を基盤にした NPO は宗教団体と異なり、その宗教の教えを直接的に伝達することはできないため、様々なジレンマを胚胎しているが、このようなアプローチは福祉国家が衰退し、社会福祉の民営化が進展する現代日本社会における新しい宗教の社会参加のかたちであることを示唆している。

台湾の研究では、ボランティアが台湾の福祉文化を生き生きと形成していることは注目に値する。そこには、福祉の担い手と受益者とが地続きであり、お互いに個人を尊重した「顔の見える」福祉の要素がある。慈済会のボランティアこそ、システム化・専門化された社会福祉を、普遍的な仏教の視座の下で「人間化 humanize」する存在である。同会の「人間菩薩」の思想は、自らの人間性を磨くことにより仏性を顕現させ、同時にこの世界に浄土を建設していこうとする宗教思想である。今、宗教福祉に求められるのは、宗教的理念に独自に基づきつつ、民間福祉の一翼を担う存在として社会の動きやニーズと噛み合う位置づけなのである。民間レベルのこうした活動が盛んになればなるほど、福祉社会も進展し、福祉文化も豊かになってくる。

日本の宗教福祉が学ぶべきは、慈済会が台湾社会のニーズと噛み合いつつ、またその社会の進路をリードしていくように展開してきた、その活動における自発性、啓発性、主体性のあり方に着目することである。

(4) 研究期間の最終段階で、3月11日、東日本大震災が発生した。多くの犠牲者、被災者に宗教者が寄り添っている。これらも今後の研究課題であるが、その情報・データは、本科研のメンバーが設立した「宗教者災害救援ネットワーク」<http://on.fb.me/gNUVkB> に集積されている。

研究成果の情報発信として、電子ジャーナル『宗教と社会貢献』Religion and Social Contribution (ISSN: 2185-6869) が刊行された。以下で無料公開している。

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/RSC/index.html>

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 15 件)

① 稲場圭信 「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」『宗教と社会貢献』1 巻 1 号、査読有(2011), pp. 3-26,  
[http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBRSC/rsc01\\_01\\_003.pdf](http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBRSC/rsc01_01_003.pdf)

② 櫻井義秀 「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」『宗教と社会貢献』1 巻 1 号、査読有(2011), pp. 27-51  
[http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBRSC/rsc01\\_01\\_003.pdf](http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBRSC/rsc01_01_003.pdf)

③ 濱田陽 「賀川豊彦と海洋文明—死線と大震災を越えて—」『宗教と社会貢献』1 巻 1 号、査読有(2011), pp. 53-77  
[http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBRSC/rsc01\\_01\\_053.pdf](http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBRSC/rsc01_01_053.pdf)

④ 稲場圭信 『『思いやり格差』社会からの脱却』、関西大学経済・政治研究所セミナー年報 2009、査読無、2010, pp. 135-143

⑤ 川端亮・秋庭裕・稲場圭信、「SGI-USAにおけるアメリカ化の進展」『宗教と社会』査読有、16号、2010, pp. 89-110

⑥ 大谷栄一 「一九三〇年代の伝統仏教・新興仏教・反宗教運動の交渉と葛藤」『日本仏教総合研究』査読有、第8号、2010, pp. 53-71

⑦ Keishin Inaba, "From Disparities in Compassion to Mutual Support", *Dharma World*, 査読無、Vol. 37, 2010, pp. 14-17

⑧ 稲場圭信, 「アメリカにおける宗教の社会貢献」、『国際宗教研究所ニューズレター』、査読無、2009, pp. 11-16

[学会発表] (計 28 件)

① 櫻井義秀、「Is Religion Social Capital in Japan?」Beijing Forum 2010年10月5日、北京大学(中国)

② 稲場圭信, 「英米におけるソーシャル・キャピタルとしての宗教論」日本宗教学会、第69回学術大会、2010年9月5日、東洋大学

③ 濱田陽 「日韓複数宗教社会論序」日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月5日、東洋大学

④ 大谷栄一, 「一九三〇年代の伝統仏教・新興仏教・反宗教の交渉と対立」, 日本仏教総

合研究学会第 8 回大会, 2009 年 12 月 16 日,  
京都府立大学

⑤ Keishin Inaba, "How Buddhist NGO Networks Bring Religion to Society", Annual Meeting of American Academy of Religion, November 9, 2009, Congress Hall, Montreal, Canada

⑥ Sakurai Yoshihide, "Management Crisis and Social Activities of Local Buddhist Temples in Japan", Annual Meeting of American Academy of Religion, November 9, 2009, Congress Hall, Montreal, Canada

⑦ 大谷栄一「戦争は罪悪か? —20 世紀初頭の日本仏教における非戦論」第 21 回国際佛教文化学術会議「仏教と平和」, 2009 年 10 月 17 日, 圓光大学、韓国

⑧ Sakurai Yoshihide, "Financing Japanese Religious Corporation: Comparison among Buddhist Temple, Shinto Shrine, and Christian Church", FINANCING OF CHURCHES AND RELIGIOUS SOCIETIES IN THE 21st CENTURY, Ministry of Culture of The Slovak Republic Institute for State-Church Relations, 14-15 October 2009, Hotel Devien, Bratislava, Slovakia

⑨ 大谷栄一「高嶋米峰と丙午出版社」日本宗教学会第 68 回学術大会パネル「明治仏教史を上書きする」, 2009 年 9 月 13 日, 京都大学

⑩ 濱田陽, 「宗教と博覧の近代史-社会貢献の視点から」, 日本宗教学会, 2009 年 9 月 13 日, 京都大学

⑪ 稲場圭信, 「宗教の社会貢献の領域と形態」日本宗教学会第 68 回学術大会、2009 年 9 月 12 日、京都大学

⑫ Sakurai Yoshihide, "Fragmented Society and the Popularity of Spiritualism in Japan" Meeting of International Society for the Sociology of Religion, July 25-31, 2009, Santiago de Compostela, Spain

⑬ 稲場圭信, 「信者の回心過程」, 「宗教と社会」学会第 17 回学術大会、2009 年 6 月 7 日、創価大学

⑭ 稲場圭信, 「Faith-Based Social Services in Japan」 Society for the Scientific Study of Religion、18 October 2008, The Seelbach

Hilton Louisville, Kentucky, USA

⑮ 稲場圭信, 「アメリカの宗教に基づく社会福祉サービス」日本宗教学会第 67 回学術大会、2008 年 9 月 14 日、筑波大学

〔図書〕(計 13 件)

① 櫻井義秀・道信良子編, 梓出版社, 『現代タイにおける社会的排除と包摂—教育、医療、社会参加の機会をめざして』2010, 351 頁

② 稲場圭信・櫻井義秀共編著, 世界思想社, 『社会貢献する宗教』(2009)、248 頁

③ 櫻井義秀『霊と金—スピリチュアル・ビジネスの構造』新潮社、(2009)、255 頁

④ 櫻井義秀『カルトとスピリチュアリティ—現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房、(2009)、294 頁

〔その他〕

ホームページ等

宗教の社会貢献活動研究プロジェクトHP  
<http://keishin.way-nifty.com/scar/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

稲場 圭信 (INABA KEISHIN)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授  
研究者番号：30362750

### (2) 研究分担者

櫻井 義秀 (SAKURAI YOSHIHIDE)

北海道大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50196135

大谷 栄一 (OHTANI EIICHI)

佛教大学・社会学部・准教授  
研究者番号：70385962

濱田 陽 (HAMADA YO)

帝京大学・文学部・准教授  
研究者番号：70389857

(H21 から研究分担者として参画)

ランジャンナ ムコパディヤーヤ (Ranjana Mukhopadhyaya)

名古屋市立大学・人間文化研究科・准教授  
研究者番号：10381899